

連載 ⑪

## 農業塾

# 自己改革 JA紀南の挑戦



講義は現場を中心に、JAの営農指導員によるキュウリなど夏野菜の管理面のポイントの話に聞き入る農業塾生（今年6月、とんだのJA実習圃場で）

農業塾は平成24年から始まり今年で7期目を迎える。本期まで234人が受講し、内訳は

## 現場実習中心に農業を学ぶ 参加を契機に直売所出荷も



農業塾参加を契機に紀菜柑出荷に力が入る廣田健司・恭子さん夫妻（田辺市稻成町で）

男性が78人（33%）、女性が156人（67%）だ。参加者は田辺から串本まで管内全域に亘り、平均的な年齢は55～60歳だが、20代や80代もいる。夫婦で参加する場合もある。

塾のスタート時期は例年3月頃で、11月頃にかけて毎月1回の講座を開く。現場での農作業体験を重視し、9～10回中の講座のうち6回はとんだ地区のJA圃場での実習を取り入れる。

習得内容は「家庭菜園の拡大版」というイメージだ。ナス、トマト、エダマメ、カボチャなどの夏野菜類と、秋に収穫するサツマ

カリキュラムでは、栽培面のイモ、11月収穫のキャベツやブロッコリーも栽培する。修了式に品評会を開くため、各自が自宅でハクサイやカブの栽培にも挑戦する。

他にも、肥料成分や土づくり、農薬や農機具の基礎知識などの講義も取り入れる。講師はJAの営農指導員が担当し、外部講師を招く場合もある。

指導部は「参加者は極力農薬を使いたくない」という方が多い」と言う。一方、実習中の野菜が虫に食われたり、病気が発生した葉や果実を目にし「実習を通じて農薬の必要性も理解されているようだ」と話す。

今期のカリキュラムも7月

紀菜柑には平成27年から出荷していたが、農業塾が弾みとなり、チャレンジする品目も増えた。しかし、昨年はエダマメを一度に植えて出荷が集中して苦労したり、ブロッコリーが変色するなどの失敗もあった。

今年は盆過ぎまでのエダマメに続き、9月以降はナスや青ネギ、冬場はダイコンやブロッコリーの出荷を計画する。「私に引き込まれて主人は大変でしようが、農業はおもしろい。自分で栽培した物は美味しいですよ」と農業にはまつている。

J A紀南は地域農業の多様な扱い手育成のため、組合員や地域住民を対象にした「農業塾」を開いている。約8ヶ月で9～10回の講座を開き、現場実習を中心に野菜栽培等の基礎を学ぶ。顔ぶれは女性や高齢者、定年帰農など多彩だ。JA

紀南でも准組合員数が正組合員数を上回る中、非農家組合員の農業理解と農業参入の道を拓くことも狙い。自分で作った野菜を家庭で食べることで地産地消運動の役割も担う。塾生がJA直売所に出荷を始めるという発展形態も珍しくない。

Aとお付き合いのあつた方はもちろん、農業塾のような活動をきっかけに、農や食に関心を持ち、JAとのつながりが深まればと思う」と話している。田辺市稻成町の廣田恭子さん（59）は平成28年の第5期農業塾の修了生。現在は夫・健司さん（59）との二人三脚でJA直売所「紀菜柑」に年間通して野菜を出荷している。

恭子さんは定年退職後に家の裏の空き地で野菜作りを始めた。実家は農家だが、「農家が教えてくれる肥料をバラバラとふるといった加減が分からないので」と、農業塾入りを志望した。

J A紀南は自己改革の実践を通じ農業所得の増大や地域の活性化にチャレンジしています